

No.98 2015. 3. 26 <sup>あおじゅかい</sup> 会報「青樹会」 会報事務局 〒252 - 0201  
中国内モンゴ砂丘・草原緑化研究会 相模原市中央区上矢部 2-14-6  
代表 押田 敏雄 押田 敏雄 方(事務局長代行)  
(Tel & Fax 042-776-2040) (Tel 042-769-1641 Fax 042-768-2612)  
<http://www5a.biglobe.ne.jp/~aojukai/> e-mail:ryokka@azabu-u.ac.jp

## 1. 押田敏雄先生の最終講義が行われました



去る2月26日、麻布大学にとって感慨深い最後の退職記念講演が開催されました。講演者は皆様ご存じの押田敏雄教授です。本学に奉職以来35年間、現在に至るまでの長期にわたる研究等をおつかいで一時間ほど話をさせていただきました。麻布獣医科大学大学院獣医学研究科博士課程で獣医学博士の称号を得て、3年間の就職浪人(オーバードクター)を経て、30歳で就職。在職中、2つの博士号(農学：日本大学・工学：千葉工業大学)を取得するという、前代未聞の研究ぶりを発揮し、その学究の深さ・広さ、努力家であること、その人生の深さを改めて考えさせられました。



押田敏雄先生

また、若かりし時の押田先生の言動も思い返され、懐かしさで一杯となりました。全く、一つの博士号を取得することさえ、尋常では無い努力と才能が必用であるのに、現在4つめの博士号取得を目標に研究しているとのこと。以前伺った



ことで思い違いがあるかも知れませんが、文学博士号であったと思っております。内容は「中国内モンゴ砂丘緑化について」であったと思います。あと5年、70歳までを狙っているようですので、陰ながら応援したいと思っております。皆さんと供に過ごしたモンゴルでの日々が研究対象であると思います。なお、最終講義には青樹会関係者からは野上、樋川、中村(民)、野上、丸山の各位



左から押田、丸山、山下(麻布大学獣医学科長)の各位

が参加されていました。

最終講義の後に、女子学生から花を貰い悦に入っていた所に突然、あの丸山さんが登壇。押田先生はまったく丸山さんの存在には気付いていなかったようでした。丸山さんとは「行列の出来る法律事務所」で有名になった参議院議員で弁護士の丸山和也氏の



左から野上、小泉、押田、樋川の各位

ことです。突然、彼より送別の辞が有り、会場は一段とサプライズに賑わいました。丸山氏は第1回と2012年(35回)の緑化ツアーに参加したと聞きました。

一時間の講演後は隣の棟に場所を変え、喉湿しの会(送別懇親会)がありました。青樹会からは日洋航空の樋川氏並びに座間で教育史を作成中の野上剛志氏が参加されていました。学長挨拶の後、花束に埋もれた押田先生に、野上氏からはブタのケーキがプレゼントされ、会場の皆さんからは思わぬシャッターチャンスが増えました。



豚のケーキ

押田先生を慕って獣医学科の教職員はもちろんのこと、本当に沢山の学外の方や、又学内では学部・学科を越えて学部生・院生の諸君や卒業生の皆さんも参加されていました。

「会者定離」とは世の常のことながら、私自身はちょっと隣の獣医学部棟の研究室に顔を出すことも叶わぬ事になるのは、いささか不如意なことと感じ入ってる今日この頃です。

押田敏雄大先輩の今後のさらなる活躍とご健勝を祈り筆を置く次第です。

麻布大学附属高校・小泉善明

## 2. 会員からのたより

<中国情報>

日本の生活に慣れた親子が中国に帰省…「人の多さと街の汚さ」に耐えられなかった娘、「人のサービス態度の悪さ」をガマンした親=中国版ツイッター

普段日本で生活している中国人には、春節(旧正月)の時期に中国に帰省する人も多い。日本での生活に慣れていると、故郷に戻った際に違和感を覚えるケースも多々あるようだ。

700人以上のフォロワー数を持つ中国版ツイッター・微博(ウェイボー)のあるユーザーは、娘を連れて久しぶり中国に戻ったときの様子についてツイートした。この親子は早朝に起きて飛行機に乗って上海に行ったようだが、写真にはぐったりとしてベンチで横になっている娘の姿が。春節2日目の上海は「崩落事故という言葉が何度も脳裏によぎるほど」黒山の人だかりだったとのことだ。

ツイートはさらに、娘がきれい好きであることを明かしたうえで「街がこれほど汚れていることに耐えられなかったみたい。路上でたくさん喫煙するし、音も異常に気になっていたみたいだし。娘は絶対に日本から離れられないと思う」とした。

このユーザーはまた、別のツイートで自身の怒りも爆発させている。「最もガマンできなかったのはサービス態度の悪さ。レストランの店員も空港のスタッフもだ。その場でブチ切れずに耐えた自分がすごいと思った」とその思いを打ち明けた。

このツイートに対して、ほかのユーザーからは「かわいそうに……でも中国で少し慣らすのがいいよ」、「自分も入国ただけで各種不適應が。帰れないよ」、「毎年帰ればどっちにも慣れるよ。最初の1~2年は慣れないけどね」、「自分も今年は帰国することになるけど、暮らさに適應できないんじゃないかとすごく心配」といったコメントが寄せられた。



写真は混雑する上海の外灘地区

長年中国で生活して、日本に移り住んだ人が里帰りする大人ですら日本と中国との環境の違いに愕然とするのだから、日本で育った子どもが中国に行ったときに受けるカルチャーショックは計り知れないだろう。頻繁に往復することで慣れてもらわなければならないのだろうか。もちろん、中国の生活にも日本にはない良い点もたくさんある。せつかく中国に行くのだから、いい思い出もたくさん作って戻ってきてほしい。(編集担当：近間由保)  
(イメージ写真は「CNSPHOTO」提供)

### 「店員のほとんどが…」と中国人観光客、日本でのショッピングで目にした“面白い現象” 中国人観光客、言葉も通じないのに助けてくれた日本人男性への思い—中国メディア

2014年2月13日、重慶晨報は「私が日本で発見した3つの小さなこと」と題する記事を掲載した。以下はその概要。

旧正月期間中、妻の強い要望で私たちは東京と北海道を7日間旅行した。実を言うと、私個人は日本についてあまり良く思っていなかった。しかし、私が出会った日本の人々は、とても友好的で親切だったと言える。その上、景色や自然保護に対する取り組みも素晴らしい。日本では3つの興味深いことを目にした。

#### 1. おしゃれを忘れない日本人女性

東京は1℃、札幌は-5℃、旭川は-12℃。雪が舞い、強風が吹き付けた。しかし、このような環境でも街で見かけた日本人女性たちは、太ももをあらわにして歩いていた。私は旭山動物園にいた女学生に「寒くないのですか？」と聞いてみると、彼女たちは「寒いけどおしゃれのために我慢している」とつたない英語で答えた。なるほど、どうりで街で見かける女性は、おばあさんも含めてみんな化粧をしているわけだ。年齢や天気にかかわらず、日本の女性は“おしゃれ”を忘れることはないようだ。



ペンギンの散歩(旭山動物園:旭川)

#### 2. 細かいことに気を配る

日本人はみな公共の場所では、物を食べず、たばこを吸わず、列に並ぶ。しかし、もっと意外だったのは、電車やバスの中に「電話をしてはいけない」という表示があることだ。優先席近くでは、電源さえも切らなければならない。公共の場所では人の邪魔になるような行為はしてはいけないとの配慮である。電源まで切るのは、恐らくマナーモードにしているも妊婦さんを驚かせてしまうからだろう。

また、日本ではごみの分別を徹底して行う。ごみ箱は、「一般ごみ」、「新聞・雑誌」、「プラスチック」、「ガラス」の4つに分かれている。もっと細かく分けられているところもある。日本人は小さいときからごみの分別処理を学ぶため、自然と身に付くのだろう。だからこそ、日本の街は清潔に保たれているのだ。一日中街を歩いた靴で雪を踏んでみたが、残ったのは塵ひとつない真っ白な足跡だった。

#### 3. 自分から交流しようとしな

街を歩いていると、いくら歩かないうちにたくさんの自動販売機に出くわす。飲み物からたばこ、新聞までさまざま。コンビニでは同じ商品が少し安く売っているのに、多くの若者は自動販売機を利用する。おそらく、手軽で列に並ぶ必要がないからか、人と接

触する必要がないからだろう。ラーメン店などでも、食券の自動販売機を多く見かけた。食券を店員に渡しさえすれば、会話をする必要がない。多くの日本人が壁に面した席を選び、黙って食べ、黙って立ち去っていった。

しかし、日本人は見た目ほど冷たくはない。少なくとも、私が何回か道を尋ねたときは、彼らの親切さを感じた。札幌に着いたばかりのとき、私と妻は中島公園近くのホテルに行きたかったのだが、歩けど歩けど見つからない。そこで私は、コンビニから出てきた男性にホテルへの道順を尋ねた。彼の手には、買ったばかりの弁当がぶら下がっていた。彼の英語はうまいとは言えず、長い時間をかけてようやく意図を伝えられた。しかし、彼にもホテルの場所はわからない様子だった。私たちが礼を言って立ち去ろうとすると、彼は「待つように」とのジェスチャーをして、携帯電話の地図でそのホテルを探してくれた。

その後、男性は私たちを心配して、ホテルまで送ってくれた。その日は雪が降っていた。5分ほど歩いてホテルに着くと、男性は笑顔で立ち去った。私は、唯一知っている日本語で何度も感謝を表した。そのとき、私は「弁当、冷めてしまったのではないですか？」と聞きたい気持ちでいっぱいだった。

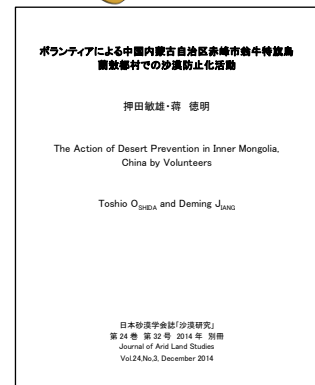
(翻訳・編集/北田)

### 3. 沙漠学会の研究論文に「ボランティアによる中国内内蒙古自治区赤峰市翁牛特旗烏蘭敖都村での沙漠緑化活動」が掲載



会報の97号でもお伝えしましたが、我々の内蒙古での20年間の緑化支援活動のまとめた口頭発表を押田先生が日本沙漠学会乾燥地農学分科会で講演された内容が、論文として同学会会誌である「沙漠研究」に蔣先生との連名で掲載されました。

20年間をコンパクトにまとめた論文で判りやすく解説されています。押田先生は3月末を以って勤務先の麻布大学獣医学部を定年退職されますが、「その記念の意味を込め、青樹会の会員各位に別刷りを謹呈(会報に同封)致しますので、ご笑覧下さい」とのことです。



### 4. 夏頃に瀋陽と烏蘭敖都村を訪問か?



2014夏のツアーで、ステーションにおいて南先生の慰霊の会を行ないましたが、「是非とも南先生の墓参を」という要望や声が幾つか届いています。これについて、8月のお盆前後での訪中の可能性について、蔣先生に確認をしたところ、「全面的に協力をしたい」との快諾を戴きました。また、先生は訪日についても強い希望を持っているようなので、協力を考えています。詳細が決定次第、ご連絡致します。

### 5. 会報の原稿を募集しています



最近、気になること、私の提案、中国情報、その他なんでも原稿をお寄せ下さい。あて先は押田(oshida@azabu-u.ac.jp)へ、メールで戴けると幸いです。なお、メールが困難な場合には郵送で(252-0201 相模原市中央区上矢部 2-14-6 押田敏雄)までお願い致します。

なお、押田は3月末で退職しますが、メールアドレスは変更されませんが、これまでの電話やFaxは利用出来なくなりますので、ご注意ください!!